

乾燥熱帯沿岸域の刺し網漁

スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区のジュゴン混獲防止にむけて

中村 亮（福岡大学）

Gillnet Fishery in the Coastal Zone of Arid Tropics

Toward the Prevention of Dugong Bycatch in the Dugonab Bay Marine Protected Area on the Northern Part of Sudanese Red Sea Coast

NAKAMURA, Ryo (Fukuoka University)

スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾での漁民とジュゴンの共存型海洋保護区について、文化人類学の観点から考察することが本研究の目的である。ここでは、ドンゴナーブ湾でのジュゴン混獲の主原因である「刺し網漁」の意義、漁場、漁法、経済効果を明らかにする。加えて、ドンゴナーブ村で実施したワークショップ（2018年8月13日）をふまえて、地域の漁業を極力制限しないジュゴン混獲防止についての現段階での案を提示する。

ドンゴナーブ村は、紅海の乾燥熱帯沿岸域に位置する、人口1200人ほどの沙漠のイスラーム漁村である。人びとはサンゴ礁海の豊かな沿岸資源にたよって生きている。ジュゴンの希少な生息地でもあるドンゴナーブ湾は、2005年に海洋保護区に指定された。また、2016年に世界遺産（自然遺産）にも登録されたことで、今後、自然環境保護政策が促進される海域である。喫緊の課題は、絶滅危惧種（VU）であるジュゴンの混獲防止である。

2011～2012年の調査で、この海域の主要漁法である手釣り漁（船上一本釣り）は、ジュゴン生息の脅威でないことが明らかとなった。2003～2013年に湾内で起こったジュゴン混獲の原因は「冬場の夜間に海草藻場周辺に設置される撚糸製刺し網漁」であった。ジュゴン混獲防止について考えるには、撚糸製刺し網漁の実態の解明が必須である。

2017～2018年に刺し網漁の実態調査を実施した。ドンゴナーブ湾の刺し網漁は、冬場（12～3月）の強風時に手釣り漁が困難な場合におこなわれる代替漁であった。湾内の88カ所の刺し網漁場の位置、水深、底質、漁獲対象を調べたところ、細い水路や、ジュゴンの餌場である海草藻場への経路をさえぎるように刺し網が設置される場所があることが判明した。これらの場所は、ジュゴン混獲のホットスポットと考えることができる。

しかしながら、2013年3月以降、ドンゴナーブ湾ではジュゴンが混獲されていない。その原因の一つとして、2018年の時点で刺し網漁師が5人しかいないことがあげられる。刺し網漁は初期投資や維持経費がかさむ漁である。また、漁師は「手釣り漁にくらべ刺し網漁は儲からない」という。若い世代の漁師は「刺し網漁は面白くないし力仕事なのでやらない」という。さらに、刺し網漁師の中には「ジュゴンの混獲を防ぐのは簡単だ。刺し網漁をやめればよい」という者もいる。

「儲からない」とはいえ刺し網漁は冬場の大切な現金獲得手段である。2017年12月24日から2018年3月28日（95日間）の刺し網漁の水揚げ高（漁船一隻、操業58日）は、28,965SDGであり、約305SDG/日（≒7.6\$）であった。この経済効果を考慮すると、ジュゴン混獲のために刺し網漁の禁止はできず、その存続は漁師の自由意思に任せるべきである。

ジュゴン混獲が近年発生しない理由について、ワークショップで漁師は「値の良い海底の魚をとるために、網を海面ではなく海底に仕掛けるようになったから」と推測した。また、海底魚を効率よくとるために「刺し網をやめてカゴ漁にしてはどうか？」という提案がでた。カゴ漁導入は、漁師とジュゴンの双方に利益のある提案であり、何より重要なのはこの案が漁師の中からでてきた点である。

カゴ漁導入には検討事項が残るが、今後、利害関係者間で協議すべき案であると考えられる。同時に、混獲ホットスポットと想定される場所での刺し網設置の禁止、海底への刺し網設置の継続が、現時点で考えうる漁業に極力制限をかけないジュゴン混獲防止案である。